

平成24年度 事業報告書

平成24年4月 1日から
平成25年3月31日まで

I 財団の運営

お客様本位の視点に立ち、大分県の文化振興施策と協調性を保ちながら、県民の幅広いニーズを踏まえた自主文化事業の実施をはじめ、県民の多様な文化活動の支援、地域文化との連携、さらには、国内外で活躍する大分県出身の芸術家の育成と活動支援など、本県文化創造の中核としての役割を積極的に推進することを基本方針として事業を実施した。特に、音楽を通じた子どもの健全育成と豊かな感性の涵養を目的とした、「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」の育成や優れた総合舞台芸術の創造・発信など、財団独自の取り組みを強化し、国において育成が図られている「地域の中核劇場」として iichiko 総合文化センターの位置づけを確固たるものとしている。

また、県民の国際化や在住外国人を支援するため、多面的な国際交流を企画するとともに、交流の場の提供や情報の提供等を行った。

さらに、お客様のための円滑な施設運営と良質なサービスの安定的な提供に努めるとともに、指定管理者制度の主旨に則ってより効果的・効率的な管理運営を行い、経費の縮減を図った。

II 大分県立総合文化センターの管理運営

1 ネーミングライツの定着

三和酒類株式会社のご協力により、平成22年度から2期目に入ったネーミングライツについて、各施設に次の愛称を使用するとともに、あらゆる機会を通じて周知、定着に努めた。

施設名	愛称
大分県立総合文化センター	iichiko総合文化センター
大ホール（グランシアタ）	iichikoグランシアタ
中ホール（音の泉ホール）	iichiko音の泉ホール
アトリウムプラザ	iichikoアトリウムプラザ
練習室等（スペース・ビー）	iichikoスペース・ビー

また、パートナーシップ履行委託事業により、財団主催の自主文化事業のうち、「宝塚歌劇花組」、「金聖響指揮 シエナ・ウィンド・オーケストラ」、「松竹大歌舞伎」、「ミュージカル『足ながおじさん』」、「野坂操壽×沢井一恵『箏』ふたりのマエストロ」、「ワレリー・ゲルギエフ指揮 マリインスキー歌劇場管弦楽団」、「岡田知之パーカッションアンサンブル」の7事業について、「iichiko PRESENTS」の冠を付し、公演を実施した。

2 自主文化事業の企画及び実施

(1) 企画

「大分県文化振興条例」や「大分県文化振興基本方針」に掲げられた大分県の文化

振興施策遂行の中核として、「本物の芸術文化に触れる機会を提供」する鑑賞系事業を自主文化事業の柱のひとつとしつつ、「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」の育成を中心に、大分県独自の芸術文化を創造・発信し「地域からの文化づくりを推進」する創造系事業を展開した。

事業の実施にあたっては、iichiko 総合文化センターパートナーシップ履行受託事業収入や文化事業基金を活用するとともに、文化庁補助金等の獲得に積極的に取り組み、入場料等の低廉な価格設定に努めた。

(2) 事業実績

鑑賞系事業

【主催公演】

財団の企画により、オーケストラ、オペラ・バレエ、ミュージカル、歌舞伎・文楽等の伝統芸能など幅広いジャンルで質の高い催しを実施した。

オーケストラでは、世界のカリスマ指揮者ワレリー・ゲルギエフに率いられた「マリインスキー歌劇場管弦楽団」が来県し、重厚な演奏が好評を博した。国内からは現在の吹奏楽ブームの火付け役ともなり、世界でも数少ない大規模吹奏楽団「シエナ・ウインド・オーケストラ」が、人気実力派指揮者である金聖響を客演に迎え、初めての県公演を開催した。

また、見て、聞いて、楽しい打楽器の世界を堪能してもらうため、日本初打楽器アンサンブルのパイオニアとして知られる「岡田知之パーカッションアンサンブル」を実施した。

「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」は、これまでの数次にわたる定期演奏会を経て、実力、知名度ともに県民に認められつつあり、引き続き、ハイレベルな練習を重ね、平成25年3月に梅田俊明氏指揮による「第4回定期演奏会」を開催した。

3年ぶりとなる待望の宝塚公演は、OBS大分放送とのタイアップにより、蘭寿とむ、蘭乃はな主演の「花組」がiichiko グランシアタに初登場、花組の持つ明るいエネルギーが舞台いっぱい溢れ、ほぼ完売の人気となった。告知・宣伝広報はOBS大分放送の負担で集中的に取り組む共同開催の新たな方式を確立した。

ミュージカルでは、「レ・ミゼラブル」を生み出したジョン・ケアード演出による「足ながおじさん」を公演し、誰もが一度は幼い日に読んだあの名作が、大人の恋の物語として華やかに甦った。

毎年開催している「松竹大歌舞伎」では、三代目市川猿之助に薫陶を受けたおもだかや澤瀉屋一門の芸をお楽しみいただき、市川猿弥が楽しいトークで、歌舞伎の魅力をより親しみやすく解説した。

伝統芸能の邦楽では「野坂操壽×沢井一恵『箏』ふたりのマエストロ」を開催、二人の名手が箏、十七絃・六段、二十五絃を变幻自在に奏でる、贅沢な和のひとときを華麗に演出した。

「人間国宝 ～その心と技～」では、尺八演奏者の人間国宝である山本邦山を迎え、その芸と精神の神髄を、日本の伝統芸能に造詣の深い葛西聖司との対談や実演を通して間近に感じることのできる機会を提供した。

【共催公演】

(財)アルゲリッチ芸術振興財団主催の「第14回別府アルゲリッチ音楽祭」のほか、「NHK交響楽団大分公演」、「大分県立芸術文化短期大学主催公演」、マスコミ提案による演劇やミュージカル公演等を開催した。

② 創造系事業・普及系事業

音楽を通じた青少年の健全育成と豊かな感性の涵養を目的に発足した「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」は、4年目の活動に入り、9月には、3回目となる弦楽アンサンブルコンサートを日本を代表するチェンバロ奏者である小林道夫氏との共演により実施したほか、街頭や病院などで開催するアウトリーチコンサート、初心者向けの楽器体験やレッスンを行うアカデミッククラスの設定など、基盤強化と対象者の拡大に取り組み、将来の音楽芸術の底辺拡大と発展に寄与した。また、第4回目となった定期演奏会も、指揮者に梅田俊明氏を招聘し、過去の3回を上回る高い評価を多くの聴衆からいただいた。

地元大分の若い演奏家たちが、NHK交響楽団トップ奏者との共演を目指す「MAROプロジェクト」は6回目を数え、公開レッスンからコンサートまで一連の成長過程をより多くの方に鑑賞していただき、演奏者同士だけではなく鑑賞者も一緒に室内楽の素晴らしい世界、成長する楽しみを広く共有することができた。

モーツァルトがその生涯の最後に完成させた日本人に最もポピュラーな傑作オペラ「魔笛」を、大分県出身のオペラ歌手団体である大分二期会を中心に、オーケストラや合唱、バレエ、衣装、メイク、舞台美術に至るまで、県内のプロアマが手づくりで作り上げた郷土色豊かな総合舞台芸術は、観客はもとより制作に携わった多くの人々にも大きな感動を与えた。

普及系事業では、各種のワークショップやレクチャーをはじめとして、「アーティストプロデュース」など「人を育て活かす」ことを目的とした事業を展開した。

ワークショップは、歌舞伎などのセリフを題材にした「朗読ワークショップ」のほか、箏・尺八・日本舞踊・長唄といった日本の伝統芸能に気軽に触れられる機会として、演奏の楽しみ方、見方などをレクチャーしたり、実際に体験してもらう、「邦楽ワークショップ」に新たに取り組んだ。また、ミュージカルの歌とダンスのレッスンなど、公演を鑑賞するだけではなく、その内容を体験する機会を提供した。その他、ミュージカル俳優を目指している若い学生達が七夕祭りのステージで華やかに歌って踊り、ミュージカルの楽しさを大分の人たちと共有するパフォーマンスも開催した。

レクチャーは、9月の歌舞伎公演に先立ち、その基礎知識や見どころ、聴きどころを解説する「歌舞伎レクチャー」をNHKの元アナウンサーで伝統芸能に造詣の深い葛西聖司氏を講師に迎え開催した。

「アーティストプロデュース」は、県内で活動する若い芸術家に発表の場を提供することを目的としながら、人が多く集まる iichiko 総合文化センターがアートと舞台芸術により、楽しさとくつろぎの両方が感じられる空間づくりを行なうため、「ハートオブクリスマス」と銘打って、商店街や周辺施設との連携により、iichiko アトリウムプラザを中心に21種類のイベントを展開した。

その他、クラシック音楽ファン拡大のため、大分県芸術文化振興会議と協力して、日頃クラシック音楽に触れる機会の少ない人に、クラシック音楽の楽しさを身近な場所で味わってもらう「文化キャラバン」を県内各地で計13回実施した。このコンサートには「MAROプロジェクト」の出演者に演奏を依頼し、県内演奏家の演奏機会の提供も併せて行った。

③ 地域文化振興支援事業

NPO法人デンク・パウゼの主催により iichiko グランシアタで開催した「ピアノ・トリオ コンサート」公演では、主催者に経費の一部を助成してパトリア日田で公開リハーサルを行うなど、地域への芸術文化の普及浸透を図った。

④福祉、医療、教育等他分野との連携事業

平成27年春の県立美術館の開館、新大分駅ビル完成を好機ととらえ、大分県の地域文化の創造や充実、芸術文化拠点づくりに向け、積極的に福祉や医療、教育など他分野との連携事業に取り組んだ。

具体的には、「iichiko グランシアタ・ジュニアオーケストラ」が、医療施設への訪問コンサートや博物館でのミニコンサート等のアウトリーチ活動に取り組んだほか、iichiko グランシアタや iichiko 音の泉ホールで実施した自主文化事業に高齢者施設利用者の皆さんや芸術関係の高校生等を招待した。

3 サービス改善提案事業の企画及び実施

大分市、別府市以外の比較的舞台芸術に接する機会の少ない小学生とその保護者、引率者計158名を「iichiko グランシアタ」、「iichiko 音の泉ホール」で当財団が主催する9つの公演に無料で招待した。

また、招待した子どもたちには、終演後にアンケートを書いてもらい、生の舞台や演奏に直接触れた感動など率直な感想が数多く寄せられた。

4 文化情報の提供

機関誌「emo (エモ)」や月刊イベントカレンダー、メールマガジンの発行、ホームページ等を通じて iichiko 総合文化センターの施設紹介や公演、イベント、県内の文化芸術に関する様々な情報を広く提供した。特に、ホームページでは、主催事業などの公演情報はもとより施設案内コンテンツを充実させるとともに、動画なども積極的に取り入れた魅力ある情報を発信することにより、アクセス増加を図った。

また、新聞広告の活用をはじめ、テレビやラジオを活用した情報提供、県内事業所への定期的な公演案内、祭りや県民が集まる場所でのPRイベント開催など、情報発信の充実・強化に努めた。

さらに、大分県公立文化施設協議会の会長館として、各施設の主催事業を取りまとめたポスター（ホールナビ）を作成し、大分空港、JR大分駅、県立病院、日本赤十字病院、成人病検診センター、県立図書館、別府国際観光港、大分県庁等に掲示した。

5 県民参加組織の育成

(1) 「emoスタッフ」の育成

自主文化事業へ県民参加の場を提供するとともに、円滑な事業運営を図る観点か

ら、公募による公演運営ボランティア「emoスタッフ」制度の充実強化を図った。

平成24年度は、50名程のスタッフ数で運営したが、年2回の研修を通じて、より一層の意識の向上とスキルアップを図った。

特に、接遇研修の実施にあたり、財団職員も参加するとともに、大分県内の公立文化施設スタッフにも参加を呼びかけ、共同研修として開催した。

(2) 「emo倶楽部」の拡充

自主文化事業運営の円滑化と県民の芸術文化に対する理解を深めるため、友の会「emo倶楽部」への加入促進に努めるとともに、公演内容の充実に加え、広報活動の強化と会員優待事業等会員サービスの充実を図った。

6 お客様の声の反映・自己評価・職員研修

お客様の声を最大限に反映した運営を行うため、施設を利用していただいたお客様(700人)を対象にアンケートを実施し、提供サービスや満足度等について調査を行った。

自主文化事業公演時においてもアンケート調査を実施し、財団の自己評価を行い、サービスの向上及び業務の改善に努めた。

また、友の会会員963名に対しアンケート調査を実施することで、今後の友の会を魅力あるものにするための基礎資料の収集を行った。

職員研修については、平成27年春の県立美術館開館と、芸術文化ゾーンの創造を見据え、(株)わらび座の相談役としてこれまでたくさんの文化行政に関わってこられた是永幹夫氏を講師に招き、「地域文化における公立文化施設のあり方と連携」をテーマに講演会を実施した。研修には、当財団以外の県内公立文化施設職員や近隣商店街の関係者にも参加いただき、一層充実したものとなった。

7 施設の管理運営

(1) 施設の利用促進

ホールをはじめ会議室、iichiko アトリウムプラザ等の施設利用の促進を図るため、過去の利用実績からリピーター候補を抽出し、積極的に要望や意見を聴くなど利用促進に努めた。

また、会議室紹介のチラシの設置や、大分オアシスタワーホテルとの相互の紹介により、OASISひろば全体のイメージアップと集客力アップを図った。

さらに、お客様のニーズに応じて休館日の臨時開館(5回)や利用時間の前後の延長(47回)等、柔軟に対応し、積極的な貸館運営を行った。利用に際しては、お客様の要望に添った綿密な打合せを行うとともに、現場でいただいた意見を施設の管理運営に反映させ、快適で利用しやすい環境の提供に努めた。

1階インフォメーションコーナーでは、平成25年度から総合受付窓口として機能させるため、施設予約の受付、友の会入会、チケット販売、駐車券販売等を3月から試行した。これにより、ワンストップでのお客様対応が可能となり、試行期間に得た情報を分析することで、一層充実したお客様サービスを目指した。

あわせて、iichiko アトリウムプラザのテーブルとイス、植栽のレイアウト等を変更し、お客様へ快適な空間を提供したり、地下1階、2階の空きスペースに竹のオブジェを設置するなど施設の有効活用に努めた。

(2) 施設の維持管理

施設全体の清掃、警備並びに設備の維持管理及び舞台技術や機構の保守点検等については、専門業者に委託することにより正確性、安全性、効率性を確保するとともに、現況、作業内容を財団が把握し指導することで、施設機能の維持と快適な環境の保持を図ることができた。

また、防災センターと連携した環境負荷低減への取り組み、大分オアシスタワーホテルやNHK大分放送局と協働した年2回の防災訓練の実施など、環境対策やお客様の安全確保についても万全を期すよう努めた。

8 施設の利用状況

平成24年度のホールの利用率は、iichiko グランシアタ（87.6%）、iichiko 音の泉ホール（90.1%）となり、iichiko グランシアタは平成23年度を下回ったものの、iichiko 音の泉ホールでは平成23年度を上回り、極めて高い稼働率となった。九州各県の類似ホールの平均利用率が75%程度で推移していることと比較すると、非常に多くのお客様にご利用いただいている状況である。

その他の施設については、新規顧客の開拓に努めた会議室、映像小ホールの利用率が昨年度より増加し、練習室も95.8%と非常に高い利用率を維持している。一方で、iichiko アトリウムプラザと県民ギャラリーの利用率は昨年度を下回った。

利用件数については、iichiko グランシアタ（227件）、iichiko 音の泉ホール（246件）とも過去最高を記録した平成23年度（グランシアタ：238件、音の泉：249件）を下回ったものの、非常に多くの利用があった。利用人数については、iichiko グランシアタが183,963人（対23年度比6,657人減）、iichiko 音の泉ホールが69,570人（対23年度比735人減）となった。

両ホールのジャンル別の利用状況は、音楽が62.4%と最も多く、次いで講演・大会が18.4%、舞踊が9.3%などとなっている。

III 国際交流事業

県民の国際理解や多文化共生意識の醸成、在住外国人に対する支援を図るため、「県民・在住外国人に広く開放された国際交流の拠点づくり」、「在住外国人の生活支援や県民・在住外国人への情報発信」、「国際交流に深く関わりのある団体等への支援」を3本柱として事業を実施した。

1 県民・在住外国人に広く開放された国際交流の拠点づくり

(1) 基本的な情報の収集・提供

国際交流プラザでは、県民と在住外国人が自由に集い、お互いの情報を交換しあえるような空間づくりを目指して、交流スペース、インターネット、新聞、雑誌、外国語図書等の利用促進を図った。

また、人権啓発フェスティバル等のブースに出展することなどにより、県民・在住外国人の国際化に関する基本的な情報の収集・提供を行った。

(2) 多文化共生意識の醸成

日本と外国の文化の紹介をはじめ、多様なプログラムを盛り込んだ国際フェスタ、県民と在住外国人が設定したトピックについて、日本語で話し合い、交流す

る「日本語deトーク」を実施するなど多文化共生意識の醸成に努めた。

(3) 多文化共生の地域づくり

国際経験豊かな講師による講話や外国映画の上映による国際理解講座を開催し、多文化共生という考え方を地域社会の活性化に繋げることができるよう、概念の普及に努めた。

2 在住外国人の生活支援や県民・在住外国人への情報発信

(1) 在住外国人の生活支援

居住、子育て、離婚、在留資格等で悩みを抱えている在住外国人を対象として、行政書士による生活相談を実施するほか、中国語、タガログ語による無料相談を行った。

また、病気や災害発生時等の緊急時に対応するため、医療・福祉ハンドブックを普及を図った。

(2) コミュニケーション支援

ホームページ「おおいた国際交流プラザ」の運営や機関誌「ラ・エスタシオン」、英語版「トンボ」、中国語版「大分情報」の発行、多言語による携帯メールでの情報発信を行うとともに、ボランティアを活用して通訳・翻訳のコーディネータなどを行い、県民と在住外国人相互のコミュニケーションを促進した。

3 国際交流に深く関わりのある団体等への支援

(1) 他機関との連携・支援

日本語教室の運営や海外との文化・スポーツ交流活動を行う国際交流団体等に対して、補助金を交付しその活動を支援した。

また、国際交流研修会の開催などにより、在住外国人を支援する各種団体や行政機関との連携に努めた。

さらに、未来を担う青少年の交流を進め、異文化体験を通じた児童・生徒の国際相互理解を深めるため、専門のコーディネーターを配置し、交流プログラムの作成や訪日校（海外）と受入校（県内）とのマッチングなどを行った。

IV スポーツの振興

1 スポーツ公園総合競技場活用促進基金の活用

大分スポーツ公園総合競技場（大分銀行ドーム）を拠点とした多様な交流の場を創出するため、基金による助成事業を行った。

2 (株)大分フットボールクラブへの貸付金管理

平成17年9月21日に大分トリニータ（サッカーJ1）を運営する(株)大分フットボールクラブへ貸付けた2億円については、平成25年3月をもって償還が完了している。

また、平成22年11月19日に融資を実行した2億円については、据置期間を経て、平成24年4月から遅滞なく償還が行われている。

(株)大分フットボールクラブからは、毎月の経営状況の報告を受けるなど情報の把握に努めるとともに、県とも連携して滞りなく返済されるように貸付金の管理を行った。

3 地域のスポーツ振興

スポーツを通じた地域の活性化や健康増進を図るため、平成24年10月にスポーツ振興事業基金を財団内に設置し、平成25年度から「総合型地域スポーツクラブ」等スポーツ団体への支援を行うこととしている。